

母子の歯科保健に関する研究 分担研究報告書

分担研究者 岡田 昭五郎

まとめ：わが国の母子歯科保健は第二次世界大戦後、主に保健所を中心に実施されたが、昭和40年代までは幼児のみならず小児のむし歯も猛威を奮った。昭和52年から1歳6カ月児健診の際に、歯の検診とともに保健指導が実施されるようになり、昭和50年代後半からようやく幼児のう歯の減少の兆しが見えてきた。平成2年度の3歳児健康診査の結果では、う歯のある者 54.21%、一人平均う歯数は2.82本である。けれども、学校保健統計における幼稚園児（5歳児）のう歯ある者の率はここ数年約80%で減少の兆しが見られない。この数値は欧米諸国の数値（60～70%）と比較しても高く、このままではFDIが国際的に2,000年を目途として掲げている「5～6歳児の50%はう歯のない者にしよう」という目標はわが国では達成できそうもない状況である。このようなわけで、本研究班は当面する母子歯科保健の問題点として「幼児のう蝕予防」を優先する事項として捉え、次のリサーチクエストション（RQ）の基で研究を進めた。

RQ1. 乳幼児歯科保健の事後評価システムの確立について

このリサーチクエストションに関しては、1歳6カ月児健診と3歳児健診の連携の実態と問題点（米満ほか4名）、重症のう歯を抱えている4、5歳児の要因、4、5歳児のう蝕予防対策（小掠ほか4名）について検討した。4、5歳児のう蝕予防対策については、種々の方法、対策が考えられるので、研究協力者の間で討議が行われた。

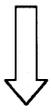
RQ2. 乳幼児の歯科保健担当者に対する教育研修法の開発

このリサーチクエストションは保育所や幼稚園で幼児を保育する者に歯科保健教育や歯科保健指導を依頼することを前提としている。少数ではあるが、保母や幼稚園の教諭、保健所の保健婦を対象に、歯科保健に対する認識、知識等について調査を行なった。（瀧口）

RQ3. 乳幼児の歯科疾患ハイリスク児のスクリーニング法の開発について

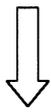
このリサーチクエストションは、う歯の多発する幼児を早期に見付けだす方法を検討したものである。質問紙による生活習慣の調査や歯垢の微生物、乳酸量と増加う歯数について検討し、歯垢微生物でスクリーニングする方法の的中率が高い結果が得られた。（谷ほか2名）

これらの研究は本年度から着手したので未完成の部分が多い。研究完成の成果が期待される。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



まとめ:わが国の母子歯科保健は第二次世界大戦後、主に保健所を中心に実施されたが、昭和40年代までは幼児のみならず小児のむし歯も猛威を奮った。昭和52年から1歳6ヵ月児健診の際に、歯の検診とともに保健指導が実施されるようになり、昭和50年代後半からようやく幼児のう歯の減少の兆しが見えてきた。平成2年度の3歳児健康診査の結果では、う歯のある者54.21%、一人平均う歯数は2.82本である。けれども、学校保健統計における幼稚園児(5歳児)のう歯ある者の率はここ数年約80%で減少の兆しが見られない。この数値は欧米諸国の数値(60~70%)と比較しても高く、このままではFDIが国際的に2,000年を目途として掲げている「5~6歳児の50%はう歯のない者にしよう」という目標はわが国では達成できそうもない状況である。このようなわけで、本研究班は当面する母子歯科保健の問題点として「幼児のう蝕予防」を優先する事項として捉え、次のリサーチクエスチョン(RQ)の基で研究を進めた。